

ロラン・バルトの物語論： 構造分析からテキスト分析へ

花 輪 光

ロラン・バルトは、「コミュニケーション」誌8号（1966年、物語の構造分析特集）の巻頭に「物語の構造分析序説」（以下「序説」と省略）を發表し、60年代フランスの物語論に大きく寄与して以来、いくつかの具体的な作品分析をとおして独自の物語論を展開している。主要なものは、1968-1969年度国立高等研究所におけるセミナーの所産、『S/Z』（1970年刊）、その初稿とも言える「男性、女性、中性」（1970年刊、レヴィ=ストロース記念論文集所収）、1969年、フランス・カトリック協会主催のシンポジウムで發表した「物語の構造分析——使徒行伝 X-XI 章について」（1971年刊、以下「使徒」と省略）、1970年、「ポエチック」誌創刊号に掲載された「どこから始めるべきか?」、1971年、ジュネーヴ大学における講演、「天使との格闘——創世紀 32章 23-33節のテキスト分析」（1971年刊、以下「天使」と省略）、1973年に發表された「エドガー・ポーの一短編のテキスト分析」（以下「ポー」と省略）などである。

ところで、「序説」は、フランスにおける物語論（物語の構造分析）へのすぐれた「序論」であるばかりでなく、バルトにおける物語分析の「理論」でもあって、『S/Z』以下の具体的分析は、いわばその応用であるとする見方が一般におこなわれている。ところが、バルト自身は、「序説」と『S/Z』のあいだに、「きわめて顕著な」「断絶」があるとしている（Barthes, 1981, p. 123）。もし「断絶」があるとするれば、それは「構造分析」と「テキスト分析」の「断絶」であると言うことができよう。といっても、この両者は、まったく相容れないものというわけではない（「ポー」、p. 29）。「テキスト分析」という呼称は、「天使」にいたるまで出てこないが、『S/Z』以後の諸論文は、しばしば「構造分析」という名のもとに「テキスト分析」について語っているし、また、バルト自身、『S/Z』は「構造分析というよりもむしろテキスト分析に属する」「天使」、p. 36, 原注〔1〕）としたり、「テキスト分析」であると断言したり（「ポー」、

p. 29, 原注〔1〕、迷いを見せている。

では、バルトの言う「断絶」とは、どのようなものであったのか。本稿は、バルトの物語分析におけるこの重要な変化を、いわゆる物語論 (narratology) の観点から検討しようとするものである (この変化の前提となるバルトの記号論的変遷と、個々の作品の具体的な分析については、ごく簡単にふれることしかできない)。

1. 文 と 物 語

「物語の構造分析」というが、「物語の構造」を、どこに、どのようにして求めたらよいのか。これが「序説」の最初の問いである。多くの人は「純粹に帰納的な方法」を適用しようとする。つまり、まず、あるジャンル、ある時代、ある社会の「あらゆる物語」を研究することによって、物語の「ある一般的なモデル」を抽出しようとする。しかし、これがユートピアであることは明らかである (言語学そのものは、たかだか三千あまりの言語に対してさえ、この方法をとりえないではないか)。世界中の無数の物語に対して、物語の構造分析は、まず「仮説的な記述モデル」を設け、このモデルから出発して具体例を偏差の形でとらえざるをえないのだ。

では、「無限に多くの物語を記述し分類するための」このモデル (理論) をどこに求めたらよいのか。「序説」によれば、言語学そのものを物語の構造分析の基礎モデルとすることが理にかなっている (といっても、「序説」がモデルにするのは、言うまでもなく構造言語学であって、生成文法ではない)。

もちろん、そのためには、前提として、文とディスクール (物語) の相同性が要請されなければならない。「序説」(第 I 章) によれば、「ディスクールは大きな《文》であり (その諸単位は必ずしも文ではありえないが)、文は (ある種の特定化によって) 小さな《ディスクール》となる」。同様にして、「物語は大きな文である。」物語は決して文の総和に還元することはできないが、構造的には文の性質をおびている (「認知的な文は、いずれもある意味で小さな物語の粗描なのである」)。したがって、「序説」によれば、「物語の一般的な言語」は、「ディスクールの言語学」の対象となる特有言語の一つとして記述される。

「序説」は、以上のように、文と物語、「文の言語学」と「ディスクールの言語学」の相同性を要請したのち、「文のモデル」にしたがって、物語の記述のレベルを設定し、物語単位の画定と分類、物語の統辭法を探ってゆく。

「序説」が設ける記述のレベルは三つ（「機能」、「行為」、「語り」）である。もちろん、レベルは操作的なものであるから、必ずしも三つである必要はない。フランスの物語論にあって、最初のもっとも基本的な範疇化は、トドロフがバンヴェニストの有名な区別にならって提唱した二分法（*histoire/discours*）であろう（プレモンによる二分法 *récit racontant/récit raconté* もこれに準ずると見てよい）。「序説」の三つのレベルのうち、「機能」と「行為」は *histoire* に相当し、「語り」はほぼ *discours* に相当する。「序説」はこの三つのレベルだけでなく、*histoire/discours* の区別もかなりしばしば援用している。

ところで、レベルを設定し、物語を階層的な構造体として考えるということは、もちろん、各レベルに固有の単位と固有の相関関係を想定し、レベルごとに独立した記述をおこなうと同時に、レベル間の関係づけを想定するということである。「序説」は、とりわけバンヴェニストによって記述されたレベルの理論を援用し、各レベルにおける横の関係（分布）とレベル間の縦の関係（組み込み）という二つの観点から物語を検討してゆく。物語の言語もまた、一般言語と同じように、諸単位を生みだす分節とそれらの単位を上位の単位に集約する組み込みとによって規定されるのである。

以下、「序説」がそれぞれ II、III、IV 章で扱っている三つのレベル（機能、行為、語り）について順に見てゆくことにする。

2. 機能のレベル

物語論における「機能」の分析は、プロップ以来もっとも進んだ領域であるが、「序説」はこれまでよりも「はるかに詳しく」考察する。事実、「序説」のもっとも大きな寄与の一つは、物語の大きな分節しか扱ってこなかったこれまでの機能分析に対して、最小の単位から最大の単位までを段階的に組み込んだ「機能図系」の可能性を開き、物語の「機能的包括」を目指した点にあると言えよう。

「序説」（第 II 章）によれば、物語にあってはすべてが機能的であり、あらゆるものが「意味」をもつ。物語は「機能」だけから成り立っているのだ。プロップ以来、物語単位は「機能」または「機能体」と呼ばれてきた。機能体は必ずしも言語的単位と一致しない。それは文以上または以下のさまざまな線分によって表わされる。機能体の相関関係にはいくつかの型があり、物語単位はまず二つの種類に分けられる。固有の意味での「機能」（プロップのそれ）と

「指標」である。前者は分布的、連辭的、換喩的な単位であり、後者は組み込み的、範列的、隱喩的な単位である。

機能単位は「相補的で因果的なある行為に関係する」（ピストルの購入は相関項としてそれを使用する瞬間をもち、受話器を取り上げることはそれを置く瞬間に関係する、等）が、「指標」は「多かれ少なかれ散漫な……ある概念に関係する」（たとえば、登場人物の性格を示す指標、彼らの身元に関する情報、など）。その場合、いくつもの指標が同一の記号内容に関係しうるし、指標がディスクールに現われる順序は必ずしも関与的でない。したがって、ただちにわかるように、ある種の物語（たとえば民話）は、きわめて機能的であるが、他の種類の物語（たとえば「心理小説」など）はきわめて指標的であり、この両極のあいだにさまざまな中間形式が存在することになる。

「機能」はさらに「枢軸機能」（または「核」）と「触媒」とに下位区分される。ある機能単位が枢軸的であるためには、「それが指示する行為が、物語内容の続きに対して、因果的な二者択一を開始（または維持、または閉止）するだけで十分である」。二つの枢軸機能単位の相関は「年代順的であると同時に論理的な二重の機能性をおびている」。これに対して、核と核のあいだに（論理的には無限に）挿入しうる「触媒」は、それぞれ一個の核と相関関係をもつ「継起的単位」にすぎない。つまり、この場合は、「純粹に年代順的な機能性」が問題となる。物語とは「継起性と因果性の混同」ないし「論理と時間性の圧縮」を組織的におこなうものであるが、それを可能にするのが、いくつかの枢軸機能体からなる物語の骨組み（話の筋）である。

「指標」もまた二つに下位区分される。狭義の「指標」（ある性格、ある感情、ある雰囲気、等に関する）と、「情報提供者」（同定し、時間的空間的な位置づけをおこなう）である。狭義の指標は常に暗黙の記号内容をもつが、情報提供者は「直接に意味をもつ純粹なデータ」である（それは少なくとも *histoire* のレベルにおいては、記号内容をもっていない）。狭義の指標は読者によって解読される必要があるが、情報提供者は「既知の知識をもたらす」。情報提供者（たとえば、登場人物の正確な年令）は、物語の他の部分に対して、どれほど《反響がない》としても、「指向対象の現実性を認証し、虚構を現実界に根づかせるのに役立つ」のである。

機能レベルの諸単位は、以上のように分類されるが、ある種の単位は同時に二つのクラスに属しうる。たとえば、「空港のロビーでウィスキーを飲む」という記述は、「待つ」という枢軸機能に対して触媒の役目を果たすと同時に、

ある種の雰囲気（現代性、くつろぎ、思い出、など）の指標となりうる。また、「拡大」という言語学的観念（マルチネ）を援用すれば、触媒、指標、情報提供子はいずれも核に対して拡大である。核は少数の項からなる有限の集合を形づくり、ある論理に支配されていて、必要にしてかつ十分であるが、これに対して、拡大は、原則的には無限に可能である。文と同様、物語も無限に触媒することができるのである。

3. 機能の統辞法

機能レベルの諸単位の結合規則について言えば、情報提供子と指標は互いに自由に結合される（たとえば、人物描写では、戸籍上のデータと性格特徴とを自由に並置することができる）。核と触媒との関係は、単純含意の関係である（触媒は、それが結びつく核の存在を必ず含意するが、その逆はおこなわれない）。核（枢軸機能体）は互いに連帯性によって結合される。物語の骨組み（いわゆる筋）を構成するのは、この核と核との結合である。「序説」はこれをシーケンス（機能連鎖）と呼ぶ。

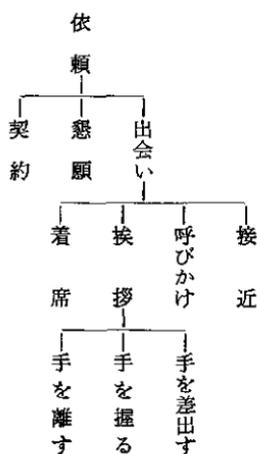
プロップ以来、レヴィ=ストロース、グレマス、ブレモンらが集中的に扱ってきた物語の統辞法の中心問題はこれであった。ただ、プロップが年代的順序の還元不可能性を主張するのに対して、他の研究者たちは、年代的順序に対する論理性の優位を認め、「時間的継起の秩序は無時間的な母型構造のなかに吸収される」と考えた。プロップのモデルによれば、31個の「機能」は一定の順序に配列され、その時間的順序は（ときに一部が欠落するとしても）あらゆる民話について同一である。しかしこのモデルでは、ある機能と対立するはずの機能（範列的な機能）が切り捨てられ、すべての機能が同じ統辞論的レベルに並んでいる。たとえば、悪者と主人公との「戦い」のあとには必ず主人公の「勝利」が来るが、「敗北」の可能性も当然考えられなければならない。プロップの機能連鎖では、そうした可能性が無視されているのである。レヴィ=ストロースの「神話分析」、グレマスの「行為項モデル」、ブレモンの「三層モデル」は、多かれ少なかれ範列的対立を考慮することによって、プロップを修正している。

これに対して、「序説」（第II章）が提出するのは、論理・時間的な「機能図系」のモデルである。物語（とりわけ、民話などではなく、小説）にあっては、指標、情報提供子、触媒を取り除いてもなお非常に多くの核（枢軸機能）が残るが、これまでのモデルとちがって、「序説」の機能図系は、それらをすべて

段階的にシーケンスに組織しようとする。

シーケンスとは、「互いに連帯性の関係によって結ばれた核の論理的連続」である。あるいは、「一種の論理的時間」によって結ばれた核の連続である。というも、「核と核を結びつけるきずなは、「年代順的であると同時に論理的な二重の機能」をおびており、物語の論理は「継起性と因果性の混同」にあるからである。読み手は、こうした「論理的連続」を、それぞれ「一個の名詞的全体」としてとらえる（プロップもブレモンも民話のさまざまな機能にいちいち命名している）。それはいわばわれわれの「物語能力」によるのだ。「われわれのうちにある物語の言語には、最初からこうした基本的な見出し項目が含まれているのである」。

たとえば、「挨拶」と名づけられるマイクロシーケンスは、いくつかの核（手を差し出す、手を握る、手を離す）を含むが、つぎには「挨拶」全体が一個の「基底単位」となって、上位のシーケンス「出会い」に組み込まれ、さらに「依頼」に組み込まれてゆく。これを図示すれば、つぎのような図系となる（「序説」によれば、これが『ゴールドフィンガー』の最初の挿話の機能図系である）。こうして物語のあらゆる核を、もっとも小さいものからもっとも大きなものまで、階層的に構造化することが可能となり、たとえば『ゴールドフィンガー』を例にとるなら、デュ・ボンがポンドに出会って依頼する上記のシーケンスから、ゴールドフィンガー対ポンドの「戦い」（これがプロップ的な大きな機能に相当する）にいたったとき、はじめて物語全体のシーケンス分析は終わる。



もちろん、シーケンス相互の統辞法は、線状的なものであるとはかぎらない。一つのシーケンスが終わらないうちに、つぎのシーケンスの最初の頭が割り込んできて、いくつかのシーケンスの諸項が鱗状に重なる可能性が大いにある。物語の機能的な構造はフーガ的なのである。あるいはまた、同一の作品のなかで、シーケンスのつながりが中断され、機能的に独立したいくつかのブロックに分かれることもある。たとえば、『ゴールドフィンガー』は独立した三つの挿話で構成され、機能関係が二度にわたってとぎれている（このように、機能的には断続的で、行為項レ

ベルでは統一的な物語が、一般に「叙事詩」と呼ばれるのである)。

したがって、「序説」(第 V 章)が言うように、機能レベルの統辞法は、「二つの能力」によって特徴づけられる。つまり、記号を引きのばす能力(記号を切り離す能力)と、そこに拡大を挿入する能力とである。たとえば、「あるシーケンスの諸単位は、このシーケンスそのもののレベルで一個の全体〔記号〕を形づくっているが、他のシーケンスからやって来た単位の挿入によって、互いに切り離すことができる」し、また、拡大(触媒、指標、情報提供者)がそこに挿入されることは言うまでもない。機能レベルの構造は、このような意味においてフーガ的であり、バイイの用語にしたがえば、物語は本質的に、「はめ込み・包み込み式の統辞法にもとづく、きわめて総合的な言語」ということになるのである。

ところで、拡大・触媒の能力ということは、逆に言えば、要約・省略の能力ということでもある。物語はまず行為項(登場人物)とシーケンス(話の筋)だけに還元することができるし、さらにそのシーケンスの階層組織は、下から順に省略して、最上位の機能単位だけにすることができる。たとえば、『ゴールドフィンガー』のもっとも簡単な要約は、ゴールドフィンガー対ボンドの「戦い」ということになる。「序説」の機能図系は、物語のこうした特性をきわめてよく説明するものであると言えよう。

また、すでに見たように機能レベルに属するある単位(シーケンスの機能体)が、ある行為項に関係する指標として、他のレベルに属することも大いにありうる。たとえば、ボンドが空港で飛行機を待ちながらウィスキーを注文するとき、このウィスキーは、多義的な価値をもつ指標として、いくつもの記号内容(現代性、富、余暇)を集約する一種の象徴的結節点となる(もちろん機能単位としては、「飲食」というマイクロシーケンスに属し、「待機」、「出発」など、上位のシーケンスにつぎつぎに組み込まれてゆく)。

また逆に、たとえば、指標や情報提供者の機能性は、「触媒のそれと同じよに弱いが、しかし皆無ではない」。この二つは、少なくとも核に対して「拡大」として働き、「引きのばされた記号」の間隙を埋める機能をもつ。この点では触媒と変わらない。ただ、指標と情報提供者の機能性は「histoire のレベルではなく、discours のレベルにある」。これに対して触媒の弱い機能性は、histoire のレベルに属している。触媒もまた「ディスクール的機能」をもち、「ディスクールを速め、遅らせ、また促進する」。しかし、触媒は「継起的単位」であって、「一個の核と相関関係を結び」、その機能性は「純粋に年代順的

なもの」である。つまり、「物語内容の二つの時点をへだてるもの」が記述されるのである。たとえば、「電話が鳴った」と「ボンドは受話器を取り上げた」をへだてる物語空間が、種々の「細かな偶発事」（「ボンドは机のほうへ進み、受話器に手をかけ、煙草を下に置いた、等々）によって満たされるのである。

このようにして、物語の各地点は、同時にいくつもの方向につながり、物語全体は上下左右に「ひどく入り組んだ直接的・間接的な諸要素の連続」として姿を現わすことになる。

4. シークェンス分析

バルトはのちに「天使」(p. 29) のなかで、「構造分析の三つの型」または「三つの課題」として、(1) シークェンス分析、(2) 指標分析、(3) 行為項分析をあげている。このうち、(1) と (2) についてはこのあと見ることにするが、「序説」における「機能レベル」と「行為レベル」の記述は、要するに、この三つの分析に集約されると考えることができよう。

(1) シークェンス分析（または行為分析）——機能（行為）の目録作成と分類。物語の機能（行為）をシークェンスとして組織すること。言いかえれば、「見かけはある擬似論理的な図式によって秩序だてられた要素連続」として組織すること。ここで問題となるのは、「純粋に経験的、文化的な論理」であって、「推論にもとづく論理」ではない。

(2) 指標分析——登場人物たちの《心理的》、伝記的、性格的、社会的属性（年齢、性別、外面的特質、社会的地位、など）の目録作成と分類。ここで指標というのは、ある記号内容（たとえば、ある人物の《神経質さ》）を伝える記述のことであって、これは無限に多様な形をとりうる。分析者は自分のメタ言語によって、この記号内容に命名するが、その記号内容の「名前」（たとえば《神経質さ》）はテキストのなかに直接現われていないことが多い。

(3) 行為項分析——登場人物たちの「機能」（役割）の目録作成と分類。ここで「機能」というのは、「ある不変の行為の主体としての特質」を指す（たとえば、「派遣する者」、「派遣される者」、「探索する者」など）。

この三つの「構造分析」のうち、シークェンス分析と指標分析は、そのまま「テキスト分析」に引きつがれゆく。一般に「テキスト分析」は、「シークェンス」、「指標」、「行為項」など、*histoire* のレベルに属する「構造分析」の概念装置を利用しつつ、*discours* のレベル（「語りのレベル」）の問題に目を向けて

ゆくと言えよう。「構造分析」はもっぱら *histoire* のレベルに適しているのである。「テキスト理論」(p. 105)によれば、「構造分析が表層テキスト (*phénotexte*) に向いているのは、そうした分析がテキストの主体に関する問題を少しも提起しないからである。それが対象とするのは、言表であって、言表行為ではないのである」。

『S/Z』は、五つのコード（声）を用いて「テキスト分析」をおこなっている。(1) 行為のコード（または経験の声）、(2) 意味素（または人格の声）、(3) 解釈論的コード（または真実の声）、(4) 文化的コード（または参照のコード、知識の声）、(5) 象徴の場（または象徴の声）である。このうち、(1)は明らかに「シークェンス分析」に相当し、(3)もこれに準ずるものであると言えよう。(2)はほぼ「指標分析」に相当する。しかし『S/Z』(p. 196)によれば、意味素とは「ある性格を記号内容にもつ、人物、場所、事物のコノテーター」であるから、「序説」の広義の「指標」は、単に「意味素」に属するだけでなく、(4) 文化的コードや (5) 象徴の場に振り分けられることになる。「指標」(意味素)と「行為項」(登場人物)の関連についてはこのあと見ることにして、『S/Z』の「行為のコード」に関する記述を読めば、それが「序説」の「機能図系」(シークェンス)とまったく同じものであることがわかる。

「行為の連鎖とは何か？ 一つの名前を展開することである。……逆に言えば、シークェンスを構成するということは、一つの名前を見出すことである。……一つのシークェンスの展開または逆に折りたたみは、文化的、有機的、現象的等々の大きなモデルの権威のもとにおこなわれる。……同様にして、シークェンスとシークェンスは、互いに調整され（一つにまとまり、分節され）、綱目のようなもの、一つの表を形づくるが、しかしその表ができる《チャンス》は、一つ上の名前が見つかる可能性にかかっている。したがって、読むこと(テキストの“読み取り可能性”を理解すること)とは、名前から名前へ、折り目から折り目へと進んでゆくことである」(p. 88-89)。要するに、シークェンスは「ある行為の連続を十分に超越的な辞項によって命名しようとする読書のある種の能力」から生まれ、「ありそうなこと、経験、“すでにおこなわれたこと”、“すでに書かれたこと”」の論理だけにしがたい、「触媒作用や発芽作用に広く道を開き」、ある論理＝時間的順序にもとづいて、「読み取り可能性のもっとも強固な骨組みを構成する」(pp. 209-210)のである。

バルト (Barthes, 1971c) はさらに、シークェンスの内部を規制する「論理」の様相について分類を試み、六つの型(因果的、継起的、意志的、反応的、継

続的、等值的)をあげているが、ここではシーケンスの問題にこれ以上立ち入らないことにする。

5. 行為のレベル、指標分析

「序説」(第 III 章)によれば、物語の構造分析は登場人物を一個の「人格」として、「本質」として扱うことに最大の嫌悪を示す。心理的密度をおびた一個人、一個の人格としての登場人物というのは、近代になって生み出された観念にすぎない。アリストテレスの詩学においては、登場人物という観念は二次的で、完全に行為の観念に従属していた。構造分析はこの伝統に立ちもどり、登場人物を単なる「動作主」としてとらえる(「人格」なるものは、われわれの社会が純粋な物語的動作主に施した批判的合理化以外の何ものでもないのだ)。

しかし登場人物は、それを動作主、行為項など、どんな名前でも呼ぶにしても、記述のレベルとして必要である。さもないと、物語の細かな「行為」が理解できなくなってしまうだろう、とバルトは言う。ブレモン、トドロフ、グレマスらは、それぞれ異なった接近法によって、登場人物の問題に取り組んでいるが、要するに、登場人物をいくつかの大きな「行為」とのかかわりにおいてとらえることが重要である。物語と「文」の相同性という前提からすれば、この考え方は動詞中心のモデルということになり、登場人物は文における「格」に相当する。つまり、動詞によって表わされる動作や行為に、各登場人物がどんな資格で関与するかということである。プロップはすでに「機能」から出発して登場人物の類型(七つの役割)を考えていた。プロップをさらに統合整理したグレマスの行為項モデルは、典型的に格文法的である。ただ問題は、格文法の場合と同様、必要にしてかつ十分な行為項はいくつか、ということであろう。

「序説」は、明らかにグレマスの行為項モデルをもっとも可能性に富むものと考えますが、しかし「物語の登場人物の分類によって引きおこされる問題は、まだうまく解決されていない」とする。「序説」(第 III 章)によれば、「本当の困難」は「行為項母型における《主体》の地位」の問題(主人公という特権的な行為者が存在するかどうか)にある。しかし「序説」は、この点について積極的な提言をおこなっていないだけでなく、行為項レベルと他のレベルとの関係を十分に説明していない。たとえば、プロップ・グレマスのモデルにしたがうなら、物語の統辞構造は、行為項(登場人物の類型)と機能(行為の類型)の結合によって考えることができる。ある物語の深層構造がこの種の単位(た

たとえば主人公＋移動)の連続から成り立っているとすると、その上の浅い層では、登場人物＋行為(ヤコブ＋駱駝に乗って移動)という形に書き換えられ、さらに表面的な層において具体的な表現(ヤコブは駱駝に乗って父のもとに赴いた、ヤコブは駱駝で旅をした、等)となるであろう。しかし「序説」では、機能図系に見合う「行為項」のモデルは提出されていない。

登場人物に関して「序説」(第 III 章)が示唆しているのは、「ある行為項に関係する指標」の問題である。すでに見たとおり、広義の指標は「真に意味論的な単位」であり、指標関係はいわば垂直の関係であって、上位のレベル(登場人物や語りのレベル、さらには「物語の状況」)においてしか飽和(補完)されえない。「序説」の大きな功績の一つは、「機能」と共起する「指標」のクラスを設け、プロップ以来の統辞論的骨組みに、いわば意味論的な「血肉」を与えたことであろう(『S/Z』以後の「テキスト分析」は、ある意味でこの指標関係を「コード」という形で追求してゆくものと言うことができる)。

登場人物だけにかぎって言えば、狭義の指標は、ある性格や感情などに関係し、情報提供者(たとえば登場人物の正確な年令)は「指向対象の現実性を認証し、虚構を現実界に根づかせる」。したがって、登場人物は「行為項」としてある役割をになうと同時に、その下のレベルでは、こうした指標に分解されよう。『S/Z』の「意味素」というのは、まさにこの種の「指標」のことである。『S/Z』(p. 196)によれば、「意味素(つまり、いわゆるコノテーションの記号内容)とは、ある《性格》を記号内容にもつ、人物、場所、事物のコノテーターである」。コノテーションの記号内容がコノテーターになるという、この奇妙な定義を説明するためには、『S/Z』(とくに XL 節)を詳しく検討しなければならないが、ともあれここで《性格》というのは、主語(登場人物)に関する形容詞であり、属詞であり、述語である(たとえば、不自然な、暗い、人気歌手、等々)。「事物の意味素や雰囲気の意味素は結局稀であるが、それらを別にすれば……意味素は人格のイデオロギーと結びついている(それゆえ、古典的テキストの意味素の目録をつくることは、このイデオロギーを観察することにはかならない)」(p. 196)。

『S/Z』は、こうした意味素を一人の登場人物に結びつけたり、それを組織化して一つの主題論的な場をつくりあげたりはしないが、「人格とは、意味素の集合体にすぎない」(pp. 196-197)という命題にしたがって、意味素を観察している。それによれば、意味素はある人物から他の人物へ移動することが可能であり、登場人物の名前や代名詞に流れついて、そこに定着する(名前が主語

となり、意味素は述語となる)。「同一の意味素が何度も同じ《固有名詞》を通過し、そこに定着するよう見えるとき、登場人物が生まれる。登場人物は、それゆえ、結合の産物である。この結合は比較的安定して(いくつかの意味素の反復によって特徴づけられていて)、多かれ少なかれ複合的である(多かれ少なかれ相似し、多かれ少なかれ矛盾している)。この複合性が、料理の味やぶどう酒の香りとまったく同じように結合物である、登場人物の《個性》を決定する」(『S/Z』、p.74)。

登場人物を「差異的要素の束」(Lévi-strauss, 1973, p.162)とする考え方は、すでにソシュール(ニーベルンゲン伝説についての考察)にも見られ、レヴィ=ストロース、グレマスなどはいずれもこの方向で「行為項」の問題を考えている。しかしバルトの場合、意味素分析は「行為項分析」と関係づけられることなく、独立したコードとして「テキスト分析」に取り入れられてゆく。

6. 語りのレベル、物語の状況

「序説」(第IV章)によれば、このレベルは、物語のコミュニケーションのレベルである。物語の送り手が存在し、物語の受け手が存在するのだ。言語的コミュニケーションにおいては、《私》と《あなた》は、絶対に、互いに他を前提とする。語り手と聞き手、書き手と読み手を予想しない物語はありえない。「序説」は、こうしたヤーコブソンのコミュニケーション・モデルから出発して、とりあえず語り手の記号だけを問題にする(バルトにかぎらず、聞き手、読み手の記号については、これまでほとんど研究がなされていないことは周知のとおりである)。

登場人物の場合と同様、物語の構造分析(内在分析)の立場に立つ「序説」(第IV章)は、語り手や読み手を本質的に《紙上の存在》であるとする。生身の「作者」、心理学的伝記的実体としての「作者」は、物語の「語り手」といかなる点でも混同されてはならないし、また、従来の「小説研究」でいうところの「全知の語り手」、「限定視点をとった語り手」などという考え方もなじまない。それらはすべて、語り手を実在の生きた人間と同じように考えるからである。構造論的観点からすれば、(物語のなかで)語っている者は、(実人生において)書いている者ではないし、書いている者は、存在する者ではない。

では、「序説」は語り(手)の記号をどのように考えるのか。「序説」はバンヴェニストの *histoire/discours* 概念を転用(濫用)して一つの積極的な提案を

おこなっている。つまり、人称法／非人称法の区別にもとづく「視点分析」である。「序説」(第IV章)によれば、物語の語り方には、この二つの体系しか存在せず、その識別は簡単である。一人称によって書き換えてみればよいのだ。たとえば、「彼はまだ若々しい様子をした50才ぐらいの男を見た」という文は、「彼」を用いて書かれているが、完全に「人称的」である。「私は……見た」と、一人称で書き換えることができるからである。これに対して、「グラスにぶつかる氷の音が、とつぜん彼にインスピレーションを与えたように思われた」という文は、「私」を用いて書き換えることができない(「私に……思われた」は不自然である)。したがって、これは非人称法である。

ここで詳述する余裕はないが、「序説」が提出した人称／非人称の対立は、従来のいわゆる「限定視点」の問題に有効な一つの示唆を与えると思われる。しかし、これによって「視点」(ないし、物語性の記号)の問題がすべて片づくわけではない。むしろ「序説」がこのレベルに関して提起する重要な問題は、内在的な構造分析の限界の問題であろう。「序説」(第IV章)によれば、語りのレベルは、先行する諸レベルの上にかぶさって物語を閉ざすと同時に、物語の状況に接し(ときにはそれを含み)、物語が消費される世界に向かって開かれている。このレベルを越えると、世界(つまり社会的、経済的、イデオロギー的体系、等々)が始まり、物語論以外の記号論に移らなければならない。「序説」が基礎モデルとして採用した言語学そのものは、これを「状況」と呼んでいる。ある文の「状況」とは、「連想された非言語的事実の総体」(ハリデー)ないし「記号行為の際に、その行為から独立した形で受信者に知られている事実の総体」(ブリュート)のことである。同様に、物語が依存する「状況」は、「物語が消費される際の作法の総体」と定義されよう。

この定義からすれば、物語論は、ここで「非物語的事実」(物語外の体系)を考慮することによって内在分析の外に出ることになる。と同時に、「受信者に知られている事実の総体」という形で、発信者(語り手)ではなく受信者(読み手)を中心に据えざるをえない。つまり、物語が消費される際の「作法の総体」(コード)を問題にするためには、「序説」の「構造分析」から「もう一つの記号論」に移らなければならないということである。ひとこと言えば、それは、物語状況としての世界(文化)を一般テキストとしてとらえ、それを構成する諸コード(「序説」が目指した「物語のラング」はその一つにすぎない)によって部分テキスト(物語)を解説する「記号論」(テキスト分析)となろう。「物語状況のコード化」が問題になるとき、言語学的モデルは無効となら

ないまでも、もはやそれに多くを期待することはできなくなる。

7. 「序説」から『S/Z』へ

バルト (1978, p.38) によれば、「物語の分析」は「記号学のもっともよく発達した分野」であるが、彼の「記号学」や「物語論」に対してさまざまな批判、反論があることは周知のとおりである。その一つは、記号学の科学的ステイタスをめぐるものであろう。たとえば、バルトのみならず、プロップ、レヴィ=ストロース、グレマスらを一括して、「現代科学の要請」に答えていないとする意見 (Ihwe, 1972, p.5) がある。彼らがこれまでおこなってきた物語構造の標準的記述は、経験的な分析と方法論的考察を区別せず、結果的にその両面において科学的要請を満足させていないというのである。

物語論における「科学主義」が、とかく単なる分類学に墮す危険を考えるならば、「経験的な分析」はむしろ有効に作用すると思われるが、こうした批判の当否はさておき、バルトが「序説」の「科学的志向」から急速に離れていったことはたしかである。「序説」の翌年 (1967年) におこなわれたある対談 (Barthes, 1981, pp.52-53) には、すでに科学的メタ言語への不信が色濃く現われているし、翌々年の他の対談 (Barthes, 1968, p.12) によれば、「彼の記号学」は、完全にソシュールの影響下にあった第一期 (1950年代)、レヴィ=ストロースの影響をうけた第二期 (1960年代の初め、『記号学原理』や「序説」の時期) を経て、60年代後半にはすでに第三期に入り、クリステヴァ、デリダ、ソレルスらの影響のもとに、「記号論的探求の科学的側面を、それまでよりもさらに明確に問題視するにいたった」という。バルトはこれ以後、いわゆる「テキスト理論」に向かうのである。

バルトによれば、物語の構造分析は現在さまざまな探求の方向を打ちだしているが、いずれも同じ科学的起源 (記号論) をもつ。しかし、この記号論の科学的ステイタスに関してどのような立場をとるかによって、探求の方向は大きく二つに分かれる。

「第一の傾向によれば、分析は世界のあらゆる物語に対して、明らかに形式的なある“物語モデル”、『物語』の構造または文法を確立しようとして、(ひとたびそれが発見されたら) そこから出発して、個々の物語がそれぞれ偏差の用語で分析されることになる。第二の傾向によれば、物語は (少なくともそれに適しているときは) ただちに《テキスト》の観念のもとに包摂される。

《テキスト》とは働きつつある意味作用の空間、その過程、ひとことで言えば、“意味形成性”のことであって、ある有限の閉じた生産物としてではなく、おこなわれつつある生産行為として観察される。それは他のテキスト、他のコードに《接続》され（これが“テキスト相互関連”である）、こうして、決定論的方法によってではなく、引用という方法によって、社会や『歴史』に接続される。それゆえ、両者が相容れないとここで言うつもりはないが、“構造分析”と“テキスト分析”はある意味で区別されなければならない」（「ポー」、p. 29）

言うまでもなく、「序説」はこの第一の方向にそって「物語モデル」を確立しようとするものであった。事実、バルト（Barthes, 1981, p.127）は、「序説」において自分がおこなったのは、「物語の一種の文法、一種の論理学」、「ある一般的構造」を構築すること、「つぎに、そこから個々のテキストの分析を導き出す」ことであり、しかも、「この時期には、自分はその文法を信じていた、それは否定しない」と言っている。

しかし、『S/Z』が冒頭（p.9）から問題にするのは、まさにこの点である。物語の初期の分析者たちが望んだのは、「ただ一つの構造のなかに世界のあらゆる物語を見ること」であった。「個々の物語からそのモデルを抽出し、つぎにそれらのモデルから大きな物語構造をつくりあげ、それを（検証するために）任意の物語にあてはめてみること」であった。しかし、この帰納・演繹的なやり方は「骨の折れる仕事」であって、しかも「結局は望ましくない」。というのも、「そのためにテキストは差異を失ってしまう」からである。

『S/Z』では、「いくつかのテキスト、ましてやあらゆるテキストを超えた一つのモデルという考え」はしりぞけられ、「おのおののテキストは、いわば自分自身のモデルである」、言いかえれば、「おのおののテキストはその差異において扱われなければならない」（Barthes, 1981, p.128）とされる。といっても、この「差異」というのは、還元不可能なある充実した特質、各テキストの「個性」といったものではなく、ニーチェ的、デリダ的な「差異」である。『S/Z』（p.9）によれば、「とどまることのない差異、テキストや言語活動や体系の無限性にもとづいて分節されてゆく差異」である。そして「おのおののテキストは、種々の反復とステレオタイプ、種々の文化的、象徴的コードによって貫かれているにもかかわらず、その差異において独自である」（Barthes, 1981, p. 107）。したがって、『S/Z』（p.19）も言うように、その独自のテキストの一つ一つが、「互いに一致することなく、無限に繰り返されるこの差異の（単なる例ではなく）理論そのものとなる」のである。

「ポー」(pp. 52-53)によれば、「テキスト分析」はテキストを(その語源的意味のとおり)「織物」と見なし、それを織りなしているのは入り組んだ終わりのないさまざまな声やコードであるとする。これが「テキスト分析」の大前提なのである。「テキストはたえず、一方から他方へかけて、いくつものコードに貫かれているが、しかしそれはある一つのコード(たとえば、物語のコード)による実現ではないし、ある(物語的)《ラング》の《パロール》ではない」(Barthes, 1981, p.128)。テキストの「モデル」は存在せず、テキストは「諸コードの無限の《自由交通》のうち存在する」(Barthes, 1973c, p.1017)。したがって、『S/Z』(p.19)によれば、それぞれのテキストは、「モデル」への帰納的な入口ではなく、無数の入口をもった綱目の一つの入口である。この入口から入るということは、「規準と偏差からなる合法的な構造」、物語や詩の「法則」を目指すということではなく、「他のテキストやコードからやって来た断片や声の展望」を目指すということなのである。

要するに、「テキスト(理論)」(p.1015)によれば、この理論の主要概念は、すべて、テキスト=織物のイメージに集約される。しかし、従来の文学理論や批評が「有限の織物」を強調し、テキスト=ヴェールの背後にある「真実」、「本当のメッセージ」、「唯一の意味」を探し求めるのに対して、テキスト理論は、テキスト=織物をその織り方において、コードの編み目において見ようとするのである。

『S/Z』は単に「序説」の方法を適用しようとするものではなく、以上のような新しい「テキスト」概念を前提にして、具体的な作品分析をおこなうのである。『S/Z』以来、バルトが物語に適用する分析法は、このような意味において、「テキスト分析」ないし「コード分析」と呼ぶことができよう。

8. レクシ、コノテーション

『S/Z』とはほぼ同じ時期にあたる「使徒」(pp.189-190)は、コード分析の手順を三つに分けている。

(1) テキストの切り取り。テキストそのものを適当な長さの断片に切り分けること。この切り取りは完全に恣意的であってかまわない。これはいわば、そこに含まれた「意味、相関関係」をすくい取るための「ふるい」である。『S/Z』ではこの「読みの単位」がレクシと名づけられ、「使徒」では聖書の各節がレクシとして採用されている。

(2) テキストのなかで引用されているコードの目録作成。そのためには、各レクシに含まれた「意味」（「相関関係」）の目録を作成すること。「意味」はコードの出発点であり、引用である。それは「あるコードのほうに向かうことを可能にし、あるコードを含意する」。それを手がかりにして、コードを「たぐり寄せる」（Barthes, 1970b, p. 7）ことが問題なのである。

(3) 調整。「標定された諸単位や諸機能の相関関係を確定すること」。これらの単位は、往々にして切り離され、重ね合わされ、混ぜ合わされ、編み合わされている。テキストは「相関項の編物」なのである。

この三つの段階にほぼ見合う「コード分析」の主要概念、「レクシ」（読みの単位）、「コンテナーション」（意味の単位）、「コード」について順に見てゆこう。

まず、レクシは、『S/Z』（pp. 20-21）によれば、あるときはいくつかの語、あるときはいくつかの文を含む。レクシの長さは「経験的に、適当に」決めればよい。「意味の移動、コードの露出、引用の通過」を観察するのに都合がよければ、それで十分である。各レクシはせいぜい三つか四つの意味を含むことが望ましい。レクシとその諸単位は、語や語群、文やパラグラフに覆われた一種の多面体を構成することになる。『ポー』（pp. 30-31）も言うように、ラングではなくディスクールが問題となっているのだから、記号表現と記号内容の同形性は要求されない。レクシはいくつかの「機能単位」（記号内容）を含みうる記号表現の断片なのである。したがって、カラー（1975, p. 202）のように、これを「序説」の「機能レベル」の単位と同一視するのは大きな誤りであろう。「言語学的観点から見れば、機能は明らかに内容の単位である」（『序説』, p. 7）。レクシが記号表現に関係するのに対して、コード分析が「もっぱら記号内容を対象にする」ことは、『S/Z』（p. 20）にも明記されている。言い換えれば、レクシはデノテーションのレベルの単位であるのに対して、そこに含まれる「意味の単位」はコンテナーションのレベルに属しているのである。

では、レクシに含まれる「意味」とは何か。「使徒」（pp. 185-186）によれば、「意味」とは「あらゆるタイプのテキスト内の、テキスト外的相関関係」である。言い換えれば、「物語のある個所に関係するか、または物語を読むために必要な文化の他の場所に関係する、物語のあらゆる特徴」である。もちろん、そこには「範列的、連辞的な相関関係、意味作用の事実や分布の事実がすべて」含まれている。要するに「意味」は、辞書のなかに見出せるような「充実した記号内容」ではない。それは本質的に「相関関係」であり、「相関項」であり、

「引用」であり、「コノテーション」である。

「序説」は物語＝文を前提として、文に適用される言語学的方法を物語のディスクールに適用しようとした。したがって、物語単位の画定と分類、そうした単位のなる「意味」、それらの単位の結合上の規則が問題となった。しかし、物語の単位は文の基本的な単位（語彙素）と同じように考えられるのであろうか。文の語彙素がなる「意味」（デノテーション）が、かなり安定している（辞書に記載されている）のに対して、物語の「語彙素」がなる「意味」（コノテーション）は、「辞書にも文法書にもない意味」、「第2次の意味」である。バルト（1971a, p. 253）によれば、あるテキストを前にして、そのテキストの唯一の意味、語彙に見られるような「充実した意味」をとらえようとしないかぎり、「相関関係の認知」（把握、命名）には制限がない。「意味形成性は、作品のあらゆるレベルに無差別に存在する」（Barthes, 1973c, p. 1019）のであり、物語にあっては、「あらゆるものが、たえず、そして何度も意味する」『S/Z』, p. 18）のである。しかし、バルトの「意味＝コノテーション」の規定については、二つの疑問がおこってくる。

まず、レクシから読み取られるこの変化する相関関係（コノテーション）は、まったく主観的なものであってもよいのか。マルチネ流の「コノテーション」は、この種のコード化されていない内容にかぎられる。しかしバルトのコノテーションは、純粹に個人的、主観的なものではありえない。「コード」という語を用いる以上、多かれ少なかれ社会的なもの、慣習化（コード化）されたものである。少なくとも『S/Z』（pp. 14-15）によれば、《機能》、《指標》など、さまざまに呼びうるこの「相関関係」は、「少しも制限されるべきではない」が、ただ、「コノテーションと観念連合を混同してはならない」。コノテーションは「一つまたはいくつかのテキストに内在する相関関係」であるが、観念連合は「ある主体の体系に準拠する」からである。とはいえ、バルトが言うように、「テキストに接近するこの《私》が、すでに、それ自身、他のテキストや無限のコードから成り立つ複数体である」（p. 16）とするならば、「ある主体の体系」は存在しうるのであろうか。バルトにとっては、「主観性」とは、「私を構成するあらゆるコードの航跡にすぎない」（p. 17）。としたら、区別さるべき「観念連合」とはいったい何であらうか。

つぎに、物語のデノテーションは、まったく問題にならないのであろうか。「序説」における狭義の「指標」、『S/Z』の「意味素」や「象徴」が、コノテーションのレベルに属するのは明らかだが、「シークェンス」や「解釈論的コー

ド」の単位は、デノテーションのレベルに属しているのではないか。これに対するバルトの答えは否定的である。『S/Z』(p. 14) はコノテーションを「(たとえば、『機能』や『指標』など)さまざまに命名することができる」としているし、「ポー」(p. 42) はこう言っている。「われわれが出会ったあらゆるコノテーションのうち……あるものは物語の行為のシーケンスの漸進的な項として定義することができた」と。

しかし、バルトが、デノテーションと思われる言語事実をも好んでコノテーションとして扱う傾向があることは否定できない。たとえば、『S/Z』は《une puissance presque diabolique》の意味素を《diabolique》(p. 124)、《Sarrasine qui n'était pas dévôt》の意味素を《impiété》(p. 161) としている。また、「デノテーションのコード」が、まったく取り上げられないというわけでもない。たとえば、『S/Z』のレクシ (10) 《je pouvais admirer la danse des vivants!》は、「デノテーションのコード」に言及している（「danse des vivants においては、それぞれの語が単に辞書の意味だけを保ちつつ隣接する語につけ加えられている」）。といっても、ここでは、「コノテーションのコード」(danse des morts) との関係において（言葉の遊戯を形成するかぎりにおいて）問題になっていることはたしかであるが。

『S/Z』(p. 15) は、デノテーションを連辞、コノテーションを範列と混同するというかつての誤り (Barthes, 1964, p. 50) を繰り返すことなく言っている。「分析的に言えば、コノテーションは、二つの空間を通して限定される。すなわち……文の継起にしたがう空間、それらの文にそって意味が寄生的に増殖してゆく空間と、凝集的な空間とである。この後者においては、テキストのある場所が、物質的なテキストの外部にある他の意味と相関し、それらの意味とともに記号内容の星雲のようなものを形づくる」と。したがって、コノテーションのこの二つの型、「寄生的増殖」と「凝集」が、物語的連辞（シーケンス）と物語的範列（広義の指標関係）に相当すると思われるが、バルト自身はこの点を明らかにしていない。しかし「ポー」(p. 53) は、「意味の存在様式」に二つの型（「展開」と「閃き」）を認め、「行為のシーケンス」は「おそらく」この前者（展開、つまり、寄生的な増殖）にあたるとしているから、こうした見方は誤っていないだろう。

「ポー」はまた、他の個所 (p. 31) で、相関関係の二つの型に他の名前（関係／連合）を与え、つぎのように区別している。「これらのコノテーションの意味は、“連合” (association) によるものであってもよい（たとえば、いくつ

もの文にまたがるある登場人物の身体的記述が、その人物の《神経質さ》という、ただ一つのコノテーションの記号内容しかもちえない場合がある。デノテーションの面には《神経質さ》という語は現われていないのだが。また、“関係”(relation)によるものであってもよい。それはテキストの、ときには非常にへだたった二つの場所の関連づけから生じうる(こちらで始まったある行為が、はるか先のほうで補完され、終了することがある)。この「連合」(association)が、ソシユールの用語を連想させるとすれば、「関係」(relation)は、イェルムスレウの用語を連想させる。「イェルムスレウでは、連辞関連が、relation とされる」(Barthes, 1969, III・1・1)からである。

「使徒」(p. 190)は同じ相関の二つの型をテキスト内的／外的として区別する。しかしテキスト内的相関の例として、使徒行伝十章における天使の出現／退去があげられていることから見て、これが「序説」の「機能関係」に相当することは明らかであり、また、テキスト外的相関が「指標関係」に相当することも明らかであろう。というのも、この後者は、言表の一特徴が「テキストを越えた超線分的な、総括的なある全体」、たとえば「ある登場人物の総括的な性格」や「ある場所の総括的な雰囲気」に関係する場合である、と説明されているからである。

しかし、「序説」の場合とちがって、相関のこの二つの型は、もはや既成の単位を分類するためのクラスではなく、意味作用を生み出す様式の大まかな分類にすぎない。テキスト外的相関のうちには、もちろん、「テキスト相互関連」が含まれるが、「使徒」(p. 190)によれば、この観念は、ある言表特徴が他のテキストに関係する、それもほとんど無限に関係するということを含意する。それは人類の文化的テキストという無限のテキストへの関係づけだからである。とりわけ、文学テキストは、きわめて多様なステレオタイプで織りなされていて、そこには過去または現在の文化への関係づけ(引用)がきわめて頻繁に見出されると。たとえば作品の「源泉」とか「影響関係」とか呼ばれるものは、「引用という現象のあまり重要でない一つの形にすぎない」のである。

9. コー ド

バルトにおけるコードの観念は、カルヴェ (1973, p. 143)も指摘するように、きわめて多義的である。『記号学原理』は、これをごく普通の意味で用い、コード／メッセージはほぼラング／パロールに対応するとしている (I・1・6, 1・

8) 『モードの体系』は、ラングに対応するコード（全般的体系）のほかに、その下位集合としての体系、他の体系と共存する体系をもコードと呼ぶ（第3章）。たとえば、「モードの体系」という大きな体系は、いくつかの「同時的体系」によって重層的に構成されているが、それらは下から順に、「現実の衣服のコード」、「書かれた衣服のコード」、「モードのコノテーション」、「レトリックの体系」、などの諸体系であるという。

ところで、『モードの体系』においては、「体系」という語もまた両義的である。しかし、この両義性は避けがたいとして、バルトはつぎのように区別している。「狭義の体系とは、連辭の面に対立する範列の面のことであり、広義の体系とは、もろもろの単位、機能、拘束の総体（たとえば、ある言語の体系、モードの体系）のことである」（II・2, 原注〔1〕）。

物語論における「コード」は、『モードの体系』における「コード」と「体系」の両義性をあわせもち、さらに曖昧である。たとえば、『S/Z』（p.27）が、「ここで、コードというのは……是が非でも再構成しなければならないリストや範列ではない」というとき、物語論の「コード」とは、全般的な体系や「同時的体系」であるばかりでなく、「範列」としての「体系」、さらには単なる「リスト」であると考えられるからである。実際、『記号学原理』（III・3・4, 3・5）や『モードの体系』（II・7）によれば、「範列」は二項対立的なものから系列的なものまで、さまざまな程度に構造化（コード化）されており、「系列型の範列」は単なる「リスト」にもなりかねない。『モードの体系』（II・7）によれば、「系列とは構造化されていないものであり、おそらく反構造とさえ言えるものなのである」。

バルトは物語の「コード」に対して、故意に曖昧な定義を与える。「ポー」（p.50）によれば、そもそもこの語は、「厳密な科学的意味において理解されるべきではない」。「コードとは、単に連合の場であり、何らかの構造の観念を呼びおこす、表記されたものの超テキスト的な組織である」。バルトにとって、コードの審級は、本質的に文化的なものであり、「コードとは、“かつて見たもの”、“かつて読んだもの”、“かつて為されたこと”の何らかの型である」。したがって、バルトのコードは、文化（テキスト）を構成するこの「かつてあったもの」の形式であって、物語のコード分析は完全に経験主義的なものとなる。「コードは、私がそれに命名したときに設定される」（『使徒』、p.25）。といっても、すでに見た（『S/Z』、p.16）ように、バルトにとっては、その「私」そのものが無限のコードで織りなされており、「私の命名それ自体、ラングの

コードという一つのコードから引き出されてくる」のであるから、「主観性」は問題にならない。「私の命名」はコードの存在を前提としているのである。

バルトのコードは、「是が非でも再構成しなければならない」ものではない(『S/Z』、p. 27) し、また、「再構成しうるものでもない」(『使徒』、p. 186)。コードは「“かつて読んだもの”の“出発点”、テキスト相互関連性の始まりにすぎず」(『ポー』、p. 52)、「コードについては、その出発点と反復しかわからない」(『S/Z』、p. 27) のである。バルトにとっては、各コードを構造化し、その諸項を「ある論理的ないし記号論的図式にしたがって」配分することは、最初から問題にならないのだ(したがって、バルトが物語分析のなかで援用している個々のコードを厳密に検討することは、困難でもあり、無意味でもあろう)。バルトにとっては、コードのこの「ほつれた状態」が、逆に積極的な価値をもつ。「コードの“ほつれた”性格は(生命、想像物、直観、無秩序が、体系、合理性と矛盾すると考えられているように)構造と矛盾するものではない。逆に(これがテキスト分析の根本的な主張であるが)、“構造化の不可欠な一部”をなすものなのである。構造——いわゆる構造分析の対象——と、構造化——テキスト分析の対象——とを区別するのは、テキストのこうした《ほつれ》なのである」(『ポー』、p. 52)。

したがって、コードの内部の構造化のみならず、コード間の「調整」も意図的におこなわれない。『S/Z』では五つ、「使徒」では十二、「ポー」では(少なくともレクシ [17] までに) 十二のコードが列挙されているが、部分的に重複したその命名や分類は、おそらく故意に「厳密さを欠いている」(『ポー』、p. 30)。少なくとも、これらのコードが同じレベルに属していないことは明瞭である。とりわけ、問題を含んでいるのは、「文化的コード」であろう。

そもそも「コードはすべて文化的なものである」(『ポー』、p. 50) とすれば、「文化的コード」という名称からして問題になるが、それはさておくとしても、「使徒」の「地誌的コード」は「明らかに一つの文化的コードであり」(『使徒』、p. 193)、「歴史的コード」も「一つの文化的コードである」(『使徒』、p. 194) と規定されている。したがって、これらのコードはおそらく、『S/Z』や「ポー」で用いられた「文化的コード」の下位コードなのである。また「ポー」の場合にも、「科学的コード」、「修辭学的コード」、「クロノロジーのコード」などは、いったん列挙されたのち、あらためて一般的な「文化的コード」の下位コードとして規定しなおされている(『ポー』、p. 50)。それゆえ、「ポー」の五つの主要コード(文化的コード、コミュニケーションのコード、象徴の場、行

為のコード、謎のコード)は、おそらくもっとも上位のコードなのである。「ポー」のこの五つの主要コードは『S/Z』とほぼ同じである(『S/Z』では「コミュニケーションのコード」のかわりに「意味素のコード」が入る)だけに、ここではコード間のレベルの相違が余計目だつ。バルトはコード間の「構造化」を「わざとおこなわない」ようにして、「テキストの多値性と部分的可逆性」を残すという(『S/Z』、p. 27)が、「テキスト分析」が一種の文化記号論である以上、あらゆるコードを包括する「文化的コード」の分節と階層化が、何らかの形で問題にならずにはいないであろう。

コード間のヒエラルキーの問題については、バルト自身にも「確かな答えはない」(「使徒」、p. 247)という。一般に物語においては、行為のコード(と、それに多くの場合、解釈論的コード)が支配的になると考えられる。この二つの論理・時間的なコードが、物語の非可逆性、物語の読み取り可能性を生みだす。古典的テキストを特徴づけるのは、そうした非可逆性、読み取り可能性(理解可能性)である。しかし、支配的なあるコードにしたがって読むというのは、歴史的な読みである。少くとも「テキスト分析」は他の諸コードによる読みによって、「意味やコードのヒエラルキーの破碎」(Barthes, 1971a, p. 251)を目指す。「天使」が見事に実行してみせたように、「読み取り可能性の障害」(p. 32)を味わい、「構造が種々の内容をどのように《散布する》か」(p. 36)を示そうとする。問題は、ヒエラルキーのない複数のコードによる読みによって、「テキストの散布」(「天使」、p. 39)、「テキストの爆発」(Barthes, 1981, p. 75)を引きおこすこと、テキストを一つのコードによって読み「一つの記号内容に還元する」ことなく、「意味形成性を開かれた状態に保つ」(「天使」、p. 39)ことなのである。

10. ま と め

物語論の観点からすれば、『S/Z』は、たしかに「序説」(理論)を引きつぎ、具体的な一個の作品(テキスト)に適用するという面をもつ。「序説」の翌年(1967年)、バルトはある対談のなかで、「『序説』をふたたび取り上げ、訂正するような具体的分析が絶対に必要である」(Barthes, 1981, pp. 49-50)ことを強調している。その「具体的分析」(『S/Z』)は、「序説」の「構造分析」の帰納・釋演的な過程の一環として、「物語構造」の検証に役立つはずであった。ところが、『S/Z』(1970)を書いたあと、同じ相手との対談(1970年)では、

「物語の構造分析を推進するためのマイクロ分析」(Barthes, 1981, p. 70) によって、「初期の記号論の静態性を乗り越え」、「構造」にかわる「構造化作用」を追求することが問題になっている(同書, p. 73)。『S/Z』は、「序説」が目指した単一の代表的モデル」にかわって、テキストの生産性を追求する「他のモデル」(『S/Z』, p. 19) を提出しようとしたのであり、事実上それが『S/Z』に始まる「テキスト分析」であったと言えよう(その前提となるのは、もちろん新しい「テキスト」概念であるが、「構造分析」と「テキスト分析」の「断絶」を強調しない場合は、むしろ「コード分析」と呼ぶことにしたい)。

コード分析は、技術的には、「序説」の「シーケンス分析」と「指標分析」をほぼ引きついでいる(「行為項分析」は取り入れていない)。あるいはさらに正確には、「シーケンス分析」を一つのコードとしてそのまま引きつぎ、広義の「指標分析」からはさまざまな形のコードを引き出す。要するに「コード分析」は、histoire のレベル(表層テキスト)に関しては「構造分析」を引きつぐと言えるが、しかし、コードの観念を採用することによって一種の文化記号論となった「テキスト分析」にとっては、物語の内在的な「構造分析」は、一つのコードにすぎないのである。

「語りのレベル」に関して言えば、「序説」は、物語のコミュニケーションを、もっぱら「語り」(語り手)の例から眺めていた。これに対して、『S/Z』は、本質的に「読み」の立場に立つ。「序説」の「構造分析」が、「テキストの客観的構造」を目指すとするれば、「テキスト分析」は、読みにもとづく「構造化作用」を問題にする(「天使」、p. 32, 『S/Z』, p. 27, 「ポー」、pp. 29-30, Barthes, 1981, p. 73, など)。「構造分析」は、文をモデルにしていた。しかし、「テキストは、もはや文をモデルにしない」(Barthes, 1973c, p. 16)。あるいはむしろ、「無限の構造」としての文、「構造化されていると同時に無限な対象」としての文(Barthes, 1971a, p. 201)をモデルとする。

「序説」が拠っていたヤコブソンのようなコミュニケーション・モデルは、コードの単一性、メッセージ(意味)の同一性、発信者のコードの絶対的優位を暗黙の前提とする(ヤコブソンによれば、「発信者によって用いられるコードに受信者が近ければ近いほど、得られる情報量はそれだけ大きい」、川本他訳『一般言語学』, p. 149)。「テキスト分析」は受信者のコードの優位を主張し、複数のコードによる読み、複数のメッセージを支持する。「テキストに働きかける者、それは読者であり、その読者は複数的である」(Barthes, 1979, p. 75)。「彼はコード解読しているのではない。“過剰コード化”しているのだ」

(Barthes, 1976, p.17)。要するに「テキスト分析」は、作品を「単なるメッセージ」(いったん発話されるやその運命が閉ざされてしまう有限の産物)とは見なさず、読み手による「たえざる生産行為」と見なすのである (Barthes, 1973c, p.1016)。

しかし、バルトの「テキスト」概念は明確に規定されているわけではない。『S/Z』以後の「テキスト分析を、その記号論的前提にまでさかのぼって検討するためには、稿をあらため、バルトの記号論的変遷をさらに詳しく見る必要がある。

Bibliographie

- Barthes, R. (1964) : *Rhétorique de l'image*, in *Communications*, N°4.
 ——— (1966) : Introduction à l'analyse structurale des récits, in *Communications*, N°8.
 ——— (1967) : *Système de la Mode*, Seuil.
 ——— (1968) : Structuralisme et sémiologie, in *Les lettres françaises*, 31 juillet-6 août.
 ——— (1969) : *Eléments de sémiologie*, Gonthier.
 ——— (1970a) : Masculin, Féminin, Neutre, in J. Pouillon et P. Maranda (éd.) : *Echanges et Communications*, tome II, Mouton.
 ——— (1970b) : Par où commencer ?, in *Poétique*, N°1.
 ——— (1970c) : *S/Z*, Seuil.
 ——— (1971a) : L'analyse structurale du récit, à propos d'Actes X-XI, in R. Barthes et al. : *Exégèse et herméneutique*, Seuil.
 ——— (1971b) : La lutte avec l'ange: analyse textuelle de Genèse 32. 23-33, in R. Barthes et al. : *Analyse structurale et Exégèse biblique*, Delachaux et Niestlé.
 ——— (1971c) : Action Sequences, in J. Strelka (ed.) : *Patterns of Literary Style*, The Pennsylvania State University Press, Pennsylvania and London.
 ——— (1973a) : Analyse textuelle d'un conte d'Edgar Poe, in C. Chabrol (éd.) : *Sémiotique narrative et textuelle*, Larousse.
 ——— (1973b) : *Le plaisir du texte*, Seuil.
 ——— (1973c) : Text (Théorie du), in *Encyclopaedia Universalis*, vol. 15.
 ——— (1976) : Sur la lecture, in *Le français aujourd'hui*, N°32.
 ——— (1978) : *Leçon*, Seuil.
 ——— (1979) : *Sollers écrivain*, Seuil.
 ——— (1981) : *Le grain de la voix (entretiens, 1962~1980)*, Seuil.
 Calvet, L.-J. (1973) : *Roland Barthes*, Payot.
 Culler, J. (1975) : *Structuralist Poetics*, Routledge & Kegan Paul, London.
 Lévi-Strauss, Cl. (1973) : *Anthropologie structurale*, II, Plon.
 Ihwe, J. (1972) : On the Foundations of a General Theory of Narrative Structure, in *Poetics*, N° 3.